

日本大の宮川泰介選手の記者会見後の報道を時系列でまとめる。(時事通信を主体)

経 過

- ・ [日大アメリカンフットボールの交流試合における傷害事件](#) (5月22日 15:17)
- ・ [関学大、日大選手の不利益考慮](#) (5月22日 22:13)
謝罪の公表控える
- ・ [巧みに誘導、隠蔽の疑いも](#) (5月22日 21:06)
コーチ「相手けがしたら得」—アメフット危険タックル
- ・ [日大「コミュニケーション不足」と弁明](#) (5月22日 20:58)
依然沈黙のアメフット部員
- ・ [日大広報部がコメント](#) (5月22日 20:32)
「つぶせ」は「思い切って当たれ」
- ・ [警視庁が傷害容疑で捜査へ](#) (5月22日 20:01)
悪質タックル、被害届移送
- ・ [代理人同席、異例の会見](#) (5月22日 20:00)
報道陣358人—アメフット悪質タックル
- ・ [「アメフット続ける権利ない」](#) (5月22日 19:23)
日大選手、頭下げ謝罪—「真実を」前監督に要望も
- ・ [宮川選手の会見要旨](#) (5月22日 19:08)
「謝罪止められた」—アメフット悪質タックル
- ・ [反則行為、監督らの指示](#) (5月22日 19:04)
「つぶせ」「やらなきゃ意味ない」—日大選手が謝罪会見
- ・ [負傷選手の父「激しい憤り」](#) (5月22日 18:57)
「がくぜん」と関学大監督—日大選手の記者会見内容に
- ・ [「けがをさせる認識だった」](#) (5月22日 18:55)
宮川選手の一問一答—アメフット
- [内田監督、前任者譲りの厳しさ](#) (5月19日)
=強い権力、学内で批判も—アメフット
- ・ [速報](#) (5月22日 15:11)
日大の宮川泰介選手は「けがをさせてしまった関学大QB、およびご家族、関係者に大きな被害と多大なるご迷惑をお掛けしたことを深く反省している」と謝罪した
- ・ [監督辞任も説明先送り](#) (5月19日)
後手に回った日大—アメフット危険行為
- [日大アメフット部の回答書全文](#) (5月17日)

◎日大アメリカンフットボールの交流試合における傷害事件（5月22日 15：17）
スポーツ報知速報

5月6日のアメリカンフットボール定期戦での悪質なタックルで関学大の選手を負傷させた日大の宮川泰介選手（20）が22日、東京都内の日本記者クラブで会見を開いた。日大が経緯説明やチーム見解を関学大に提出する期限とされる24日を待たずに異例の会見となった。

選手は弁護士らにともなわれて席についた。

宮川選手の代理人弁護士は、会見を開くことになった趣旨説明として

「監督、コーチから（反則行為への）指示があったことを明らかにし説明をする目的」

「関学大選手への謝罪の第一歩」と説明。

また、20歳になったばかりの学生本人が公の場に立ったことについて「ご本人、ご両親ともこの会見が事実についてつまびらかにするだけでなく、被害選手とそのご家族、関西学院大学アメリカンフットボールへの謝罪の意味がある。

『顔を出さないで何が謝罪だ』ということ」と本人の決意の表れだと明かした。

◎平成30年5月22日 22時13分

[戻る](#)

関学大、日大選手の不利益考慮＝謝罪の公表控える

関西学院大アメリカンフットボール部は22日、日本大アメフト部の宮川泰介選手および両親が、けがをさせた関学大選手とその両親に対して18日に謝罪に訪れていたことを公表しなかった理由について、「謝罪に来たことを明らかにすると日大選手（宮川君）が何らかの不利益を被る可能性があった」などと説明した。報道各社に送った文書で明らかにした。

最初から宮川選手が謝罪に来ようとしていながらも、日大アメフト部に止められていたことも理由に挙げ、「真相については本人の口から明らかにしてもらうことが大切だと考えた」と記し、関学大アメフト部としても、けがをした選手の父親の奥野康俊氏としても公表することを控えていた、とした。

◎平成30年5月22日 21：06

[戻る](#)

巧みに誘導、隠蔽の疑いも＝コーチ「相手けがしたら得」－アメフト危険タックル

危険なタックルで関西学院大の選手を負傷させた日本大の宮川泰介選手。記者会見で陳述書を読み上げた後、自分の言葉で質問に答え、監督だった内田正人氏らによる悪質な反則行為の指示の存在を明らかにした。

宮川選手によると、内田氏が直接指示を下すことはほとんどなく、井上奨コーチを通じた間接的な言葉で悪質なプレーを進んで実行するようにそそのかされた。ただでさえ権力のある監督に対して、部内の雰囲気は「意見を言えるような感じではなかった」。選手を練習から外し、精神的に追い込んで誘導したようなやり方が実行されたのならば、卑劣と言われても仕方がない。

井上コーチが「関学大との定期戦がなくなってもいい」「相手のクォーターバックがけがをして秋の試合に出られなかったらこっちの得だろう」と言い放ったという言葉は耳を疑うような内容。悪質なプレーを後悔して試合後泣いていた宮川選手に、同コーチは「優し過ぎるところが駄目なんだ」と責めたともいう。

11日に宮川選手が関学大選手に直接謝罪する意向を示すと、内田氏が「今はやめてほしい」と言って止めたとの証言は、指示があった事実を隠蔽（いんぺい）しようとしたとも解釈できる。記者会見では、スポーツマンシップを問われた宮川選手が言葉に詰まる一幕があったが、責任を問われるべきなのは選手の気持ちを追い込んだ指導者ではないのか。

部の指導体質が明らかになった以上、内田氏の監督辞任だけで問題は解決しない。日大は24日をめどに関学大に追加回答を行う予定だが、現状で満足な内容になることは考えにくい。

宮川選手は退部の意思を明らかにし、「監督、コーチからの指示があったとはいえ、僕はやってしまったことは変わらない。アメフットを続ける権利はない」と言った。日大には一刻も早い真実の説明が求められる。

◎平成30年5月22日 20:58

[戻る](#)

日大「コミュニケーション不足」と弁明＝依然沈黙のアメフット部員

日大アメリカンフットボール部の宮川泰介選手が22日の記者会見で、監督だった内田正人氏らからの指示で危険行為に及んだと明らかにしたことを受け、日大企画広報部は声明を発表した。『1プレー目でクォーターバックをつぶせ』という言葉があったことは事実」と認めながらも「ゲーム前によく使う言葉で『最初のプレーから思い切って当たれ』という意味」と主張。「宮川選手と監督、コーチとのコミュニケーションが不足していたことについて、反省している」と弁明した。

アメフット部の練習場などがある日大文理学部キャンパス（世田谷区）では、記者会見

のテレビ中継後、数人の部員が部室を出入りしていた。ある部員は「自分の口から答えることはできない」とノーコメント。数人が自主練習に訪れた様子だったが、グラウンドから声は聞こえず静まりかえっていた。

フットサルのサークルに所属する1年生の幡野汐音さん（18）は、会見の中継を見ていたという。「監督やコーチをずっと信頼していたと思う。会見した選手は嫌だっただろうが、すごいと思った」と宮川選手の勇気に感心していた。

◎平成30年5月22日 20:32

[戻る](#)

「つぶせ」は「思い切って当たれ」＝日大広報部がコメント

日大企画広報部が宮川泰介選手の記者会見についてコメントを発表した。全文は次の通り。

本日、本学アメリカンフットボール部の宮川泰介選手が、関西学院大学フットボール部との定期戦でルール違反のタックルをし、相手選手にけがを負わせた件につきまして、心境を吐露する会見を行いました。厳しい状況にありながら、あえて会見を行われた気持ちを察するに、心痛む思いです。本学といたしまして、大変申し訳なく思います。

会見全体において、監督が違反プレーを指示したという発言はありませんでしたが、コーチから「1プレー目で（相手の）QBをつぶせ」という言葉があったということは事実です。ただ、これは本学フットボール部においてゲーム前によく使う言葉で、「最初のプレーから思い切って当たれ」という意味です。誤解を招いたとすれば、言葉足らずであったと心苦しく思います。

また、宮川選手が会見で話されたとおり、本人と監督は話す機会がほとんどない状況がありました。宮川選手と監督・コーチとのコミュニケーションが不足していたことにつきまして、反省いたしております。

◎平成30年5月22日 20:01

[戻る](#)

警視庁が傷害容疑で捜査へ＝悪質タックル、被害届移送

アメリカンフットボールの試合中に起きた悪質タックル問題で、けがをした関西学院大の選手側が大阪府警に提出した被害届が警視庁に移送されたことが22日、分かった。試合は東京都調布市で行われており、今後は調布署が傷害容疑で捜査する。

反則行為は、6日に行われた日本大―関西学院大の定期戦で発生。ボールを投げ終えて無防備な状態にあった関学大の選手に日大の宮川泰介選手（20）が背後からタックルし、

3週間のけがをさせた。

同署は今後、宮川選手から事情を聴くほか、当時監督だった内田正人氏やコーチの指示の有無についても調べるとみられる。

◎平成30年5月22日 20:00

[戻る](#)

代理人同席、異例の会見＝報道陣358人—アメフト悪質タックル

アメリカンフットボールで関西学院大の選手を悪質なタックルで負傷させた日本大の宮川泰介選手の記者会見は、東京都千代田区の日本記者クラブで開催された。同席した代理人の弁護士は実名での報道と顔の撮影も認め、「被害者に謝罪するのが会見の目的。顔を出さない謝罪はない」と説明した。

日本記者クラブは会見に弁護士などの同席は認めていないが、宮川選手が学生であること、相手選手側から警察に被害届が提出されていることなどを理由に特例として認めた。

メディアの関心も高く、358人の報道陣が詰め掛けた。日本記者クラブによると、4月27日に開催されたサッカー日本代表前監督のハリルホジッチ氏の会見に集まった332人を上回って今年最多だという。

◎平成30年5月22日 19:23

[戻る](#)

「アメフト続ける権利ない」＝日大選手、頭下げ謝罪—「真実を」前監督に要望も

「アメリカンフットボールを続ける権利はない」。試合中、悪質なタックルで関西学院大の選手を負傷させた日本大の宮川泰介選手（20）が22日、問題が発覚して以降、初めて報道陣の前に姿を見せた。「監督の指示だが、自分がやったことには変わらない」「被害選手やご家族、関係者に深くおわびする」。数十秒間にわたり頭を下げた。

宮川選手は黒っぽい上下のスーツ姿。顔を出さない謝罪はないとして、実名の報道と顔の撮影を認めた。記者会見が行われた日本記者クラブのホールには報道陣300人以上が詰め掛け、宮川選手の現在の心境や反則行為に及んだ経緯について次々と質問が飛んだ。

反則行為を指示された際の心境については、「追い詰められて悩み、ここでやらなければ後がないと思ってしまった」と振り返った。反則行為で退場になった後、事の重大さに気付きテントの中で泣いたと明かした。

宮川選手は会見中、終始思い詰めた様子で表情は硬かった。答えに詰まり考え込む場面

もあったが、質問には落ち着いた様子で簡潔に答えていた。

日大の指導陣に対しては「同じことが起きないように願います」と要望した。「自分の意思に反することは、アメフットに限らずやるべきではない」とし、「監督とコーチ陣からのプレッシャーがあっても、自分で正常な判断をすべきだった」と反省した。

会見の後半では、当時監督の内田正人氏について、「償いの一歩として真実を話さなければならぬと思う」と話す場面もあった。

平成30年5月22日 19:08

[戻る](#)

宮川選手の会見要旨＝「謝罪止められた」ーアメフット悪質タックル

6日の関学大との定期戦で悪質なタックルをした日大の宮川泰介選手が、22日の記者会見で自らの陳述書を読み上げた。

要旨は次の通り。

一、3日、プレーが悪いということで練習を外された。内田監督から「やる気があるのか分からない。試合に出さない」と言われた。試合前日の5日には、井上コーチから「相手クォーターバックを1プレー目でつぶせば出してやると監督から聞いた」と言われた。追い詰められ、悩んだ。

一、(タックルを含む3度の反則で)退場となり、テントに戻った後、事の重大さに気が泣いた。試合の2日後、監督にもうアメフットをやりたくないと言うと、「世間は監督をたたきただけで、お前じゃない。気にするな」と言われた。井上コーチらから退部を引き留められた。

一、11日に父とともに監督と井上コーチに会い、父が「個人的に謝りに行きたい」と申し入れると、監督から「今はやめてほしい」と言われた。父は「選手は監督の指示に従っただけ」との旨の公表を求めたが、拒絶された。18日に相手方に父と私で直接謝罪の意を伝えた。

事実を明らかにすることが償いの第一歩だと決意し、この陳述書を書いた。

(日付はすべて5月)

平成30年5月22日 19:04

[戻る](#)

反則行為、監督らの指示＝「つぶせ」「やらなきゃ意味ない」一日大選手が謝罪会見

アメリカンフットボールの悪質タックル問題で、謝罪する日大の宮川選手＝22日午後、東京・内幸町の日本記者クラブ

6日に東京都内で行われたアメリカンフットボールの日本大―関西学院大の定期戦で、関学大の選手がボールを投げ終えて無防備な状態にあったにもかかわらず、背後からタックルして腰や膝に全治3週間のけがをさせた日大の宮川泰介選手が22日、東京都内で記者会見を開き、井上奨コーチを介して当時監督の内田正人氏から指示を受け危険な反則行為に及んだと明らかにした。同選手は「大きな被害と多大な迷惑を掛けたことを深く反省している」と述べて謝罪した。

宮川選手によると、反則行為があった試合の3日前から練習を外されるなど精神的に追い詰められていたところ、井上コーチから「監督にお前をどうしたら試合に出せるか聞いたら、相手のQB（クォーターバック）を1プレー目でつぶせば出してやると言われた。『つぶしにいくので僕を使ってください』と監督に言いにいけ」と告げられた。その通りに6日の試合前、内田監督に直接伝えると、「やらなきゃ意味ないよ」と念を押されて送り出された。

関学大が事情説明などを求めた抗議文に対して日大が15日に送った回答書では、指示の有無について「指導と選手の受け取り方に乖離（かいり）が起きていたことが問題の本質」としており、食い違いが明らかになった。

宮川選手は21日までに日大本部から2度の事情聴取を受けたが、代理人を務める弁護士は「部からは一度も（危険行為に及んだ）理由について確認がない」と述べた。同選手は18日に自分の両親とともに負傷した関学大選手らと面会し、謝罪したことも明らかにした。日大の内田氏らが関学大に謝罪に訪れたのは19日で、同氏は同日付で監督を辞任。しかし謝罪を受けてなお内田氏の説明が不十分なことから、関学大選手の父親、奥野康俊氏は21日、宮川選手を対象とする被害届を大阪府警に出していた。（了）

平成30年5月22日 18:57

[戻る](#)

負傷選手の父「激しい憤り」＝「がくぜん」と関学大監督―日大選手の記者会見内容に

アメリカンフットボールの試合中、悪質なタックルで関西学院大の選手を負傷させた日本大の宮川泰介選手が、反則行為は監督を務めていた内田正人氏とコーチに指示されていたと記者会見で明らかにしたことを受け、けがをした選手の父親、奥野康俊氏は22日、「激しい憤りを覚える。監督やコーチが最初から息子にけがをさせようとしていた。絶対に許されないことだ」などとするコメントを公表した。

奥野氏は「このような指示を出すこと自体があってはならない。さらに強制し、追い詰めるやり方は社会のルールを全く逸脱している。こうしたことが学校の中で起きていたこと自体が信じられない」と指摘。警察に提出済みの被害届を「取り下げる準備もあったが、

今回の会見を見て刑事告訴も検討せざるを得ない状況だ」とした。

関学大アメフト部も同日、鳥内秀晃監督の「がくぜんとしている。スポーツの場で起きたこと自体が信じられない。アメフト、スポーツの範ちゅうを超えている。今後は警察の捜査にも委ねられることになるだろう」との談話を発表した。

宮川選手自身に関し、奥野氏は「してしまったことを償い、再生していただきたい。勇気を持って真実を話してくれたことに感謝する」。鳥内監督も「行為は許されないが、勇気を出して真実を語ってくれたことには敬意を表したい。立派な態度だった」とした。

関学大は日大に対し、真相究明を求めて24日をめどに新たな回答書を出すよう要請している。その内容を精査した上で、記者会見を開く予定だ。

平成30年5月22日 18:55

[戻る](#)

◎「けがをさせる認識だった」＝宮川選手の一問一答―アメフト

悪質なタックルをした日大の宮川泰介選手は記者会見で「本当に申し訳ありません」と深く頭を下げ、丁寧に質問に答えた。

一問一答は次の通り。

一内田監督から反則の指示はあったのか。

そう認識している。コーチから伝えられた言葉は「つぶせ」。

けがをさせるという認識で、そういう意味でしか捉えられなかった。

一なぜそんな指示をされたのか。

練習でやる気、闘志が感じられないと監督、コーチから言われていた。

その原因は自分では分からない。

一拒否はできなかったのか。

この週（試合のあった6日の前）から練習に入れてもらえなかった。

今後も練習にも入れてもらえない状況にはなりたくなかった。

一監督との関係は。

日本代表に行くと言われた時もそうだが、意見を言えるような感じではない。

理不尽といえば理不尽な部分もあったかもしれない。そもそも話をする機会がない。

一後悔の念はあるか。

監督とコーチからプレッシャーがあったにしろ、プレーに及ぶ前に、自分で正常な判断をするべきだった。自分の弱さだと思う。

—自分にとってアメフトとは。

高校から始めて、熱中していた。ただ大学に入って、厳しい環境で気持ちが変わっていた。好きだったフットボールが、あまり好きではなくなってしまった。もうアメフトを続ける権利はないと思っている。

—被害届が出された。

出されても仕方がない。向こうの選手のご家族としたら、当然だと思う。

平成30年5月19日 時事通信

[戻る](#)

内田監督、前任者譲りの厳しさ＝強い権力、学内で批判もアメフト

日大アメリカンフットボール部の内田正人監督は大学内でも常務理事と人事部長を務めるなど、力ある立場にあった。辞意表明について、身内の日大関係者からも「対応が遅過ぎた。辞任はやむを得ない」と厳しい言葉が聞かれる。

日大を40年以上率いた名伯楽、篠竹幹夫氏の後任として、2003年に就任。ショットガン隊形を考案し、スパルタ指導で鳴らした故人の指導スタイルを踏襲した。伝統校の強さを受け継ぐプレッシャーもあっただろう。「指導は厳しい」という部員の声は定着していた。

昨年12月の甲子園ボウルでは関学大を破って27年ぶりの優勝を果たし、名門復活を印象づけた。東大の森清之ヘッドコーチは、内田監督を「やり方は僕らとは違うが、強いチームをつくっていた。方法論の違いはあっても敬意を持っていた」と評する。悪質なプレーを指示するようなイメージとは遠い存在感があった。

大学内では理事長からの信頼が厚く、これが問題への対応の遅れにつながったことも想像に難くない。真相解明には、日大の自浄作用が求められている。(了)

平成30年5月22日 15:11

[戻る](#)

速報＝日大の宮川泰介選手は「けがをさせてしまった関学大QB、およびご家族、関係者に大きな被害と多大なるご迷惑をお掛けしたことを深く反省している」と謝罪した

日大の宮川泰介選手は「けがをさせてしまった関学大QB、およびご家族、関係者に大

きな被害と多大なるご迷惑をお掛けしたことを深く反省している」と謝罪した

平成30年5月19日 時事通信

[戻る](#)

監督辞任も説明先送り＝後手に回った日大アメフト危険行為

日大アメリカンフットボール部の選手が試合中に悪質な反則行為で関学大の選手を負傷させてから2週間近く。問題が深刻化しても表に出なかった内田監督がようやく、公の場で謝罪した。スポーツ界を揺るがす問題に発展し、日増しに高まった現場責任者への批判。後手に回った対応だった。

内田監督は19日、けがをした選手と父親、関学大の鳥内監督らに直接謝った。関学大の抗議文に対する回答書を提出した後、関学大に17日の記者会見で「被害に遭った選手と保護者に対し、直接の謝罪の申し入れがなかったことに遺憾の意を表す」と指摘され、重い腰を上げたように映る。

関学大の鳥内監督は「すぐにでも謝罪すべきだった。後手、後手に回ったから余計に事が大きくなっているのではないか」と話した。事の重大性を認識していなかったとみなされても仕方ない。

内田監督は辞意を表明したが、首をすげ替えて済む問題ではない。関学大が強い疑念を抱くのは、なぜ1人の選手だけが過度のラフプレーに及んだのか、という点。「今年の甲子園ボウルや今春の試合でルールの範囲内でプレーしていたのに」と疑問を呈している。

日大は回答書で、内田監督の指示を全面否定し「ルールに基づいた『厳しさ』を求めるが、今回は指導と選手の受け取り方に乖離（かいり）が起きていたことが問題の本質」と説明。しかし関学大は実際の試合状況との矛盾を強調する。24日がめどの次の回答にもよるが、極めて危険で悪質な反則行為を招くような体質が根深いと認められれば、監督交代だけで問題は解決しそうにない。

平成30年5月17日

[戻る](#)

日大アメフト部の回答書全文

日大アメリカンフットボール部の加藤直人部長、内田正人監督名による関学大アメフト部への回答書全文は次の通り。

◇第51回定期戦における弊社選手による反則行為に係る貴部からの申し入れに対する回答について

平成30年5月6日に行われました定期戦において発生した弊社選手の反則行為について、負傷された貴部選手にお見舞い申し上げますとともに心より謝罪いたします。そして、一日も早い回復をお祈り申し上げます。また、ご迷惑をおかけしました貴部関係者の皆さまに深くおわび申し上げます。

平成30年5月10日付で送付いただきました貴部からの申し入れに対し、以下のとおり回答いたします。

①弊社選手の前半第1攻撃シリーズ1プレー目の反則行為に対するチームとしての見解および行為を受けた貴部選手ならびに保護者へのチームからの正式な謝罪について

弊社としましては、アメリカンフットボール公式規則に掲げるフットボール綱領を尊重しており、意図的な乱暴行為を行うことなどを選手へ教えることは全くございません。

弊部の指導方針は、ルールに基づいた「厳しさ」を求めるものでありますが、今回、指導者による指導と選手の受け取り方に乖離（かいり）が起きていたことが問題の本質と認識しており、指導方法に関し、深く反省しております。

弊社選手による反則行為を受けました貴部選手および保護者の方に心よりおわび申し上げます。

②弊社監督が試合終了後にメディアに対して出したコメントに対する見解と同コメントの撤回および指導者として当該事案が発生したことについての正式な謝罪について

上記①でご説明いたしましたとおり、弊部は規則に基づいた指導を行っております。同コメントは、もとより規則に違反してもよいと意図するものではなく、選手に「厳しさ」を求めていることから発したものでした。

しかし、真意が伝わらず反則行為を容認する発言と受け取られかねないものであり、本意ではありませんため、ここに、試合終了直後にメディアに対して発した弊社監督のコメントは、撤回させていただきます。

当該事案が発生したことについて、ご迷惑をおかけしました関係者の皆さまに指導者と

して謝罪いたします。

また、一部メディアで報道されております、当日のミーティングにおける弊社監督が選手に対して発した発言も、規則に違反し貴部選手を負傷させる意図は全くなく、選手全員に「厳しさ」を求め、士気を上げるために行ったものでした。

繰り返しになりますが、ご迷惑をおかけしました関係者の皆さまにおわびいたします。

※「事実」「経緯」などのチームとしての見解について

弊社として把握する事実、当該プレーに至った経緯、それまでの指導内容、試合後の対応などについてですが、速やかな回答が必要なことは十分に認識しておりますが、弊社において現在、確認作業および再発防止策の策定を行っております。恐縮ですがお時間をいただき、平成30年5月24日（木）をめぐりに回答させていただければと存じます。何とぞ今しばらく猶予をいただきますようお願い申し上げます。

重ねてではございますが、このたびの反則行為により負傷された貴部選手ならびに保護者の方に対し、心より謝罪いたします。また、ご迷惑をおかけしました貴部関係者の皆さまに深くおわび申し上げます。

今後、二度とこのような行為が行われないよう、ルールおよびスポーツマンシップ教育・指導の徹底を図ってまいりますことをお誓い申し上げます。